# アニメぢゃないっ！！

@さう

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

２０１７年クリスマス。輝きを放つ実物大ユニコーンガンダム。これはその完成までの道のりである。　　これハーメルンなんじゃね？　と思って二つ目の作品として登録しました。すっごくアホな話です。

なろうの方ではいつ削除されるかヒヤヒヤしていた。

※元々が販売用だったため『ガンダム』はそのまま使っていますが『サイコフレーム』は『ゲヒルンフレーム』だったり、登場人物の名前が違ったりしています。

# 目次

ユニコーンの輝き ―― 1
職人達 ―― 17
日本の神々 ―― 27
ゲヒルンフレーム起動 ―― 37
神々の輝き ―― 49
取引 ―― 58
宇宙旅行 ―― 63

# ユニコーンの輝き

アニメぢゃないっ!!

２０１７年９月２４日

ダイバーシティ東京プラザにて、ユニコーンガン〇ムの展示が始まった。

多くの人がデストロイモードの輝きを見上げる中、その光景を見下ろすものがあった……

なんだかアレな短編です。サクッと読めます。

専門用語や難しい言葉はなるべく排除して、話も読みやすく纏めました。

色んなネタを突っ込みました。気付いてニヤリと笑ってくれると幸いです。

※本作にはエセ方言が多大に混入しております。申し訳ございません※

※本作はフィクションであり、コメディです。繰り返します。本作はフィクションであり、コメディです。マジで頼んます※

０００１ユニコーンの輝き

それは２０１７年９月２４日（日曜日）の事だった。
ダイバーシティ東京プラザにて、ユニコーンガン○ムの展示が開始された。
以前お台場に展示されていたＲＸ７８、つまり、初代ガン○ムに比べると知名度は少し劣るものの、その搭載されたギミックに、ガンダムの事なんて知らない、むしろオタクきめーとのたまっている連中も「なにこれすげー」とはしゃいだ。
夜空にデストロイモードの赤い光が溶けていく。
これは、ユニコーンガン○ムの変身形態で、白いボディの各所が割れ、赤い部分が露出する。
知らない人から見ると、傷の様に見えるかもしれない。
しかし地味な顔が開いて、ガン○ムフェイスが出てくるというのは、ワクワクする。
これによって、ユニコーンガンダムの映像ソフトの売り上げが少し上がった。
白いボディ。
溢れる赤い光。
赤い部分の劇中設定は、名を「ゲヒルンフレーム（伏字）」といい、操縦者（ＮＴ）の脳波に反応する小さなコンピュータチップを金属に混ぜ合わせた素材で、機体の運動性

能や操作性を上げるためのものだったが、どうして光っているのかもよく分からず、どうして妙な力が出るのかもよく分からない。そういう、設計に無く予想もしていなかったおかしな力の象徴。

ガン〇ム好きな人、そうじゃない人、とりあえずノリで参加したカップル。
様々な人達が見上げるユニコーンガン〇ムを、見下ろしている者たちがいた事を、まだ誰も知らない。

・・・・・

２０１７年９月２７日
日本、総理官邸に闖入者が現れた。
喋る小鳥である。
姿はウグイスのそれであった。
仕事を終え、さぁ食事をしようかというところで入って来た小鳥は、

「はじめまして。お時間よろしいでしょうか」
と、随分流暢な声で話しかけてきたのだ。
そもそも、いくらウグイスとはいえ、総理官邸に侵入できるものではない。
どこから入って来たのか。
控えているＳＰ達は冷や汗をかいた。
総理はというと、新しいオモチャか何かかと勘違いしていたのだが。
「食事の場で重要な話し合いがされる事は多いと知った。日本国の統治者であるあなたと話をしたい」
続けて、やはり流暢な日本語で話しかける。
恐ろしくリアルだが、ドローンの類だろう。
もし爆弾でも詰まっていたら。
今更になって、ＳＰ達はこの得体の知れないウグイスを捕まえるために駆け寄った。
「お、ああ?」
ＳＰ達の口から間抜けな声が漏れた。
ウグイスに触れることができないのだ。
見に見えない膜の様なものがウグイスを覆っており、１０ｃｍ程まで手を近付けると弾力を感じる。押せば押す程強くなり、とうとう反発力で手が跳ね返ってしまう。

バランスボールやゴムマリの様な感触だった。
ここに来て、どうやらオカルト的な出来事が起こっていると総理は理解した。
特に取り乱す事は無い。
この様なものは日本各地、それに世界を回っているとよくある。実際に対話をした事もある。
古きもの、ヌシ、カン、カムイ、妖怪、マジム、様々なものを見たり、話したりした。
今の所それぞれの約束を違えては居ない。
果たしてこのウグイスはどこからの使いだろうか。
「はじめまして。日本国総理大臣阿部靖三です。御用向きを聞かせて頂いてもよろしいでしょうか」
落ち着いた声で、問う。
「これは、自己紹介が遅れました。私は、アルク・メルク・ヌファ・ポポンチ３０７、船長、メルオルと申します。種族はナニュニュメスです」
ＳＰも絡んだドッキリか何かなんじゃないかと、総理が思ったのはしょうがない事だ。
ナニュニュメス、などと、言い難い言葉も流暢に話す。
これは相手の名前を言い難くて困っている自分の映像を見て笑うとか、そういうもの

ではないのだろうか。
　ＳＰを見回すと、緊張した面持ちで、もしもの時には総理に覆い被さって盾になれる様に構えている。
「ああ、これは中継用の……　そちらではドローンというのかな？　そういうものですよ」
　と、ウグイスが言う。
　総理の表情や間から、何かを感じ、察して言葉を続けたのだ。
　少なくとも、相手はそれだけの知性があるという事になる。
　総理は、とりあえずドッキリの線は捨てて、まだ話をした事の無い古きものだと思って対応する事にした。
「用向き……　なんのために来たのか、という事ですね？」
「はい」
「調査と……　そして、もし可能ならば力を貸して欲しいのです」
　首の回転から細かな所作までウグイスそっくりなそのドローンは、本当に困っている様に見えた。
　それは言葉に含まれる感情の声色まで表現しているせいかもしれない。
「力を貸して頂きたいのです」

「ほう」
生贄か、祭事か、今手が空いている者は……　と、総理はすぐに考えを巡らせる。
「ゲヒルンフレームの技術を、提供していただけないでしょうか」
総理を始め、周りのＳＰが固まった。
いや、正確には、５人のＳＰの内１人は笑いを堪えるのに必死で、もう１人は完全に
「ブバッ」と吹き出して居た。
総理は、驚きを全く表情には出さず、
「理由をお聞きしてもよろしいでしょうか」
ウグイスは続ける。
「はい。実は……」

・・・・・・

ウグイスドローンは去っていった。
一通り話をした後、また次回の会談でさらに話を詰めましょう。そういう事になっ
た。
ウグイスはまるで霧の様に霧散して消えたが、去り側に、

「盗聴の危険はありません。日本国にとってもゲヒルンフレームの事は重要機密でしょうから」

と言い残して。

いくら総理官邸といえど、盗聴の危険はある。むしろ他所よりずっと高いだろう。

電話は確実に盗聴されている。

ウグイスが去った後、しばらくの沈黙があった。

そして、

「ウグイスの……　いえ、メルオル船長の話が……　分かった方はいますか？」

周りで固まっているＳＰに対する言葉だ。

少し間を置いて、一人がすっと手を挙げた。

メルオル船長の話を聞いて吹き出してしまった男だ。

総理は１つ頷いた。

「やはり、ガン〇ムの劇中に登場するアレだと思うのですが」

分かりきっていた答えだ。

メルオル船長の話から、９月２４日に展示が開始されたアレだというのは阿部総理もわかっていた。

だが、阿部総理は、この「ゲヒルンフレーム（伏字）」については、知識がなかった。

またしばらくの間を置いて、
「麻宗さんを呼んでください」
一人のＳＰが頭を下げ、部屋を退出していった。
ＳＰから言付けられた秘書は麻宗に連絡を取った。
それから2時間程して、麻宗は総理官邸に現れた。
「あんだよ。重要な話って聞いたから急いで来てみりゃ俺一人かよ」
だいぶ粋の良い言葉遣いの彼は、阿部総理の古くからの盟友である。
「俺に相談って事は、とうとう始まりそうなのかい？」
麻宗は眉を寄せる。麻宗は近々始まりそうだという戦争の事を懸念していた。左翼からは目の敵にされているが、主戦派というわけでもない。誰だって戦争は嫌だ。
日本文化を愛する麻宗は、文化財産が破壊される可能性のある戦争というものを特に嫌っていた。
しかしイザとなれば動けるのはまず自分だろうという自覚もある。
「そうではなくて……　なんと言いますか……　ガン〇ムって知ってますか？」
「おう。なんだ？　そっち方面の話かい。最近のは下のやつらの方が詳しいが、俺を呼んだって事は、国で祭りでも打ち上げようって腹かい？」
「いえ、その……」

阿部総理もガン〇ムは知っていた。
アニメは今や重要な輸出品である。なかなか時間が取れないが、各国要人の好きな作品や、有名な作品はなるべく目を通す様にしている。
ガン〇ムも観た。観たのは劇場版三部作で、テレビシリーズは観ていないが。
「麻宗さん、ゲヒルンフレームはご存知ですか？」
「ん？　ああ、知ってるが……」
このゲヒルンフレーム（伏字）は阿部総理が観た初代ガン〇ムには登場していなかった。
だいぶ後の劇場版「逆襲のロット」で有名になったものである。
阿部総理はゲヒルンフレームを知らなかった。
「アニメの話をするために俺を呼んだのかい？　早急にって言うもんだから飛ばして来たってのに。まったく突然どうしたんだよ」
麻宗はニヤニヤ笑う。
阿部総理は特に嫌いなものは無く、オタク文化についてもまぁまぁ寛容ではあるのだが、趣味性も特に無く、規制についても票が集まるならば、という程度に考えていた。
そんな阿部総理が突然、ピンポイントで趣味の話をしてきたのだ。
長い付き合いの麻宗は、妙に嬉しくなってしまう。

「いや、それがですね……」
続けて語られた阿部総理の話を聞き、ウグイス、もとい、メルオル船長の許可を得てＳＰが録画していた映像を見た。
麻宗は、阿部総理がやっとこっちに踏み込んで来たと思ったのに、なんだこういう事かとガッカリした。
そして、
「こりゃあ……　やべぇな……」
ガッカリした気持ちもすぐに吹き飛ぶ。
「なるほど、こりゃ俺にしか話せねぇわけだ。他のモンじゃ聞く耳すら持たんだろうぜ」

・・・・・

メルオル船長は、太陽系外から来た異星人だった。
母星の方向はまだ話せないそうだ。
９月２４日の夜。
偵察用ドローンがちょうど東京の上空にいた。
そして、ぼんやりと輝くユニコーンガン〇ムを発見した。

多くの人々が集まり、崇めている。
その姿は鎧を着た地球人の様にも見え、興味がそそられた。
調べてみると、どうやらアレは地球のマシーンらしいというのが分かった。
特に気になったあの赤い光は、謎の力を発生させ、あのそびえ立っているマシーンの別の型の出力でさえ、小惑星を押し返す程の力が発生したとも。
高出力起動では緑色の光に変わるので、赤い光のあの状態はまだ力を隠しているのだろう。
この星にあんな凄まじいものがあったとは驚きである。
メルオル船長は、まずユニコーンガン〇ムについて調べた事をさらさらの述べた。

そして、なぜそのゲヒルンフレームの技術を貸して欲しいのかというと。
「我々の星系はこのままでは消滅してしまうのだ」
メルオル船長の星系は、現在ブラックホール彗星接近の危機に晒されていた。
ブラックホールが彗星になるのか阿部総理には分からなかったが、メルオル船長の話によればこれは特殊な例らしい。
直径はこの太陽系のおよそ1千倍。
保有する質量に関しては、聞いたこともない桁で説明された。

これが「宇宙コワイ」というものだろうか、と阿部総理は半ば現実逃避していた。
地上から目視できない距離でも通られただけで間接的な影響が発生し生態系が崩壊してしまう。
メルオル船長の母星は今まさにその直撃を受けようとしていた。
影響は出始めており、地球時間換算であと１００年の内に母星は滅ぶ。
メルオル船長を始め、多くの船乗り達が、移住可能な惑星の探索と、そしてこのブラックホール彗星の進路上の知的文明に警告を送る役目に就いた。
残念な事に、地球に訪れたのは後者だった。
この地球も、地球時間で１０００年後にはブラックホール彗星の影響で滅びるらしい。
地球の文明レベルから言って、２０００年後には既に滅んでいるかもしれないし、順当に技術を継承していけば恒星間航行ぐらいはできる様になっているだろう。という事で警告は行わないつもりだった。
警告範囲の距離としてもっとも遠いこの地球の調査を最後に、メルオル船長は帰るつもりだった。
しかし、夜空からぼんやりと光るユニコーンガン〇ムを見て、興味を持ち、調べて、考えが変わったらしい。

恒星間航行、恒星間移民が可能だとしても、やはり母星を守れるならそれに越した事は無い。

ゲヒルンフレームの力で、あの彗星をどうにかできないだろうか。

そう考えたのである。

「ありゃ空想の産物だと説明すりゃよかったじゃねぇか」

劇中では宇宙コロニーや月に都市がある。観測すればそれらは分かるはずだ。

「恒星間航行や恒星間移民が可能な技術力ですし。太陽系の中から出られない文明レベルなんて誤差の範囲なのかもしれません」

あるいは、興味のある、必要なものだけ調べて、その情報の正しさの部分は調べなかったのかもしれない。

宇宙人とは現代の若者に近いメンタルなんだろうか。

「フィクションがよく分からない方に、フィクションとは何か説明できる自信がなかったんです。それに、もし私たちが拒否して、他国へ行ったらと思うと……」

メルオル船長がゲヒルンフレームと引き換えに提示したのは、幾つかの技術だった。

日本は技術力によって経済大国なり得ている。

技術で得たお金で金融関係も儲ける事ができている。

もし、他国が日本に対し圧倒的な差をもって技術大国になってしまったらどうなるの

か。
資源を売って儲ける事ができない日本は簡単に崩壊する。
二番じゃダメなんです。
「話ぶりからすると、なんとも騙しやすそうな連中みたいだしな……」
麻宗もため息を吐く。
場合によっては宇宙に地球の恥を晒しかねない。
そもそも、よその惑星に警告して回っている辺りがお人好しに見える。
１０００年後に影響を受けるという、こんな所まで。
宇宙というものはそういうものなのだろうか。

・・・・・

二人ともしばらく無言だったが、
「やってみましょうか」
阿部総理が一言発した。
麻宗はニヤリと笑い、
「おう、やってみようぜ」

と応えた。

「うちのを使わせてもらうぜ。なんせ、アニメの空想科学を実現しようってんだ。バレたらまたマスコミが騒ぐ。うちのなら、まぁなんてことはない」

むしろ、支持してくれる連中が増えるのではないかとさえ思った。

「すみません。お願いします」

阿部総理は、政務で鍛えられた美しいお辞儀で麻宗に頼んだ。

阿部総理は、ちゃんとしたデータを用意して、メルオル船長にフィクションを説明するつもりだった。

対して麻宗は「面白そうだから」やる気になっていた。

二人の思惑は全く違ったが、かくして秘密裏に「ゲヒルンフレーム開発計画」はスタートした。

# 職人達

## ０００２職人達

「これイタズラとちゃいますか？」
「……多分イタズラちゃうで……」
大阪の小さな町工場だった。
聞いたことのない会社からの発注があったのだが、その内容が明らかにおかしかった。
「これ、ゲヒルンフレームて、ガン○ムですやん。完全にイタズラですよ」
「ガン○ムいうたら、あのアニメのか？」
工場長はガン○ム世代ではなかった。
「でもな、やっぱイタズラちゃうで……これは多分やらんとアカンやつや」
技術力のある小さな町工場には、色んな仕事が入ってくる。
９割は普通の部品発注。もちろん、高い精度での注文だが。
そして、たまにこういう注文が入るのだ。

どこの誰も分からない所からの発注である。
それは、どこぞの外国であったり、非合法団体であったり、様々である。
そして今回は、
「これは多分お国からのもんや……」
工場長は感覚的にそういうものが分かる様になっていた。
発注してきた会社は聞いたことのない会社だが、これを持ってきたスーツの男の佇まい、そして、異様な金払いの良さ、何か巨大なものが蠢いている感覚。
むしろ、こうやって微妙に分からせてくる圧力の掛け方が、明確にそれを示していた。
「国からて……」
まだ若い彼は、いまいち信用できない様だった。

二人は応接室に戻った。
そこには「ちょっとうちのと相談してきます」と断って退室した時と同じ姿勢のまま、黒いスーツの男が座っている。
工場長は短く「受けます」と応えた。
スーツの男は1つ頷いて、支度金がみっちり詰まったスーツケースを置いて去っていった。

「工場長、これどうするんですか？　無理ですよ」
「無理なら無理でいい言うとったやないか。金だけ貰って何もしないわけにもいかんし。とりあえずやってみようや」
工場長の言葉に、さっきまで眉を歪めていた若い男はニヤリと笑った。
騙されているかもしれない。そもそも実現不可能である。
しかし、彼もまたガン〇ムが好きなのだ。お金をもらって好き放題やられるなら、こんなに楽しい事は無い。
「とりあえず出よか」
「和歌山の名産ってなんでしたっけ？」
渡された書類には、他の提携工場が書かれていた。
力を合わせてやれ、という事らしい。これは珍しい事であった。

・・・・・

「これ河村さんは信ぢはったんだすか」
「これは、間違いなく本気のもんですよ」
大阪から来た河村工場長達を迎えた横縞鉄鋼の上田社長はため息を吐いた。

「確かに、持って来た人みたら本物やと思いますけど。しかし、これうちには無理ですよ」
河村の仕事は、高精度でのフレーム製作だった。
そして、上田の仕事は、その素材を作る事。
かかる問題は上田の方が難しかった。
「うちのもんに聞きましたけど、これアニメのもんや言うやないですか。なんでも細かいコンピュータを金属に溶かし込んでるいう……　そんなもん無理ちゃいますか？」
「無理なら無理でええ言うとったやないですか。多分これ「無理」やいうデータ欲しがってるんやと思いますよ」
上田工場長もそういうフシがあると思っていたので、なんとなく納得してしまう。
無理なものを無理だと証明しろという仕事はなかなか受ける機会が無い。
二人の胸の内には、何やらモヤモヤしたものが燻っていた。
「ほなら、とりあえずやってみましょか」
上田が少しさっぱりした表情で言った。

・・・・・

廃棄パソコンをスクラップ場から大量に買い取ってきて、分解した。

基盤を溶鉱炉に投げ込むと、ぽふっ、と間抜けな音を立てて燃えて溶けた。
「燃えましたね」
「せやな」
次に、脳波玩具を幾つか買ってきた。
脳波を感知してボールを浮かせたり、脳波を感知して猫耳が動くアレである。
脳波を増幅する装置と聞いて、思い付いたのがこれだった。
溶鉱炉に投げ込まれたそれらは、やはり燃え尽きた。
猫耳に火が付く音は、なんとなく「ニャン」と聞こえた。ちょっと可哀想だった。
「燃えましたね」
「せやな」
一応、記録として映像も撮っている。
これで、コンピュータチップを金属に溶かし入れるなんて無理だと分かるだろう。
だが、
「そもそも、ゲヒルンフレームってなんやろ。上田さん知ってますか？」
「いえ、私も若いのから聞いただけでして」
かくして、上田と河村、そして数人の職人達は、「逆襲のロット（伏字）」と「ガン○ムＵＣ」の上映会を始めた。

その頃、総理官邸の一室でも上映会が行われていた。

・・・・・・

異星人との接触に居合わせたＳＰの私用パソコンをプロジェクタに繋ぎ、ちょうど「ガン○ムＵＣ」を観終わったところだ。

「逆襲のロット」は「やっこさん、あの展示してるもんからＵＣを知って、そこからこっちに遡ったんだろうぜ」と麻宗に勧められて先に観た。

阿部総理は困惑していた。

面白いアニメーション作品ではあったし、逆襲のロットの方は主人公や登場人物が自分の知っているキャラクターでちょっとワクワクした。ＵＣについても現在のアニメーションのレベルはここまで凄かったのかと関心した。

しかし、それはそれとして、

「麻宗さん。あれ、小惑星どうやって押し返してたんですか？」

「そういう力場が発生するらしいぜ？」

「ビーム砲を防御していたんですが……」

「そういう力場が発生するらしいぜ？」
　そして二人とも黙ってしまった。
「これは……　アニメですね……」
「……そうだな」
　また、二人とも黙ってしまった。
　壁際に突っ立っているＳＰの内、二人は一生懸命笑いを抑えている。
「なぁ、思ったんだけどよ」
　麻宗がまず口を開いた。
「この、にゅーたいぷとか、強化人間とか、そういうのをまず用意しねぇといけないんじゃねぇか？」
　ＳＰの一人が盛大に吹いた。
　激しく咳き込んでむせるＳＰを放置して、
「うちの超能力者で、あんだけできるやつっていたか？」
　麻宗の言葉に、
「我が国の保有するＥＳＰ能力者では無理です。せいぜいが板壁の向こうの人間を当てられるとか、テレパシーで目の前の人をちょっと気持ち悪くさせる程度で、あの距離で鉄の塊のロボットの中にいる人間を特定したり、精神波での会話やイメージを送るなん

てできません。まして、あの威力のテレキネシスなんて……」
「ゲヒルンフレーム作って増幅すりゃなんとかなるかもしれねぇよ？」
「しかしそれはアニメだからで実際にゲヒルンフレームなんて……」
うなだれる阿部総理。
もちろん最初からできるとは思っていない。
だが、麻宗とのこの会話から、異星人にこのことを説明する難しさを感じて、気分が重くなった。
そんな阿部総理に、麻宗は楽しそうな声で言った。
「ま、もうスタートしちまってるんだから。とりあえず結果が出るまではやってやろうぜ」
「……そうですね」
やはり思惑が違う二人は、それぞれの政務に戻る。
上映会、会議のスケジュールはなんとか確保してある。
麻宗は次の上映会を楽しみに、阿部総理は胃の痛みを感じながら総理官邸を出ていった。

・・・・・・

二人の工場長、社長、そして職人達を交えた上映会は終わった。
皆んな、時折涙を流しながら作品を楽しんだ。
「これ、無理じゃないですか?」
上田が一言つぶやいた。
「せやな……」
河村もそれに応える。
無理なら事を証明するための注文だと二人とも分かっていたが、こうやってアニメを観ても、なんだか胸のモヤモヤしたものが取れない。
「溶かし入れんでも、脳波がちゃんと通る仕組みのあるフレームを作って、それに脳波を増幅したり脳波で動くコンピュータチップを入れればいいんちゃいます?」
「せやな」
脳波はいわゆる電気信号である。つまり、電気信号を増幅すれば良い。
そう考えると、二人ともできそうな気がしてた。
はじめちょろちょろと始まった話だが、若い職人も交えて、どうやってゲヒルンフレームを作るかの話になっていた。
もちろん劇中で登場するものは作れないだろうが、脳波で操れるロボット、というの

が職人達の心を刺激した。
「俺の同窓生が大学残って筋電義肢の開発してます。ちょっと連絡してみますか」
「ちょい待ち。発注元に確認してからや。勝手に他所に漏らしたら家族ごとドナドナやで」
なんだかんだと話が進んでいく。

□

# 日本の神々

## ０００３日本の神々

時は流れて、十月末日の事である。
出雲に八百万の神々が集まっていた。
神無月、すなわち十月。
旧暦に合わせて集まった神々は少し騒がしかった。
神無月の間、神々、特に各地の土地神は出雲に集まり、縁結びの話し合いをするのだ。
主に自分の地域の縁結びの話を他所の土地神や近所の土地神と話し合う。
または、結ばれた縁を各神々に報告する。
これによって縁が結ばれたり、結ばれた縁に神の承認が与えられたりするのだが……
「神社で式挙げる若者減っとるしなぁ……」
「披露宴を結婚式と勘違いしとる奴が多すぎるんや」
「同棲とか、デキ婚とかややこしいわ」
「日本にあるよその教会で挙げている式て、あっちの神様の管轄になるんか？」

「国際結婚も調整しんどい」
などなどと神々がボヤく程、仕事が減り、そして難しくなっていた。
そんな中、今年は別の話し合いもある。
「靖国から陳情上がってきたて。アマテラス姐さんびっくりしてはったで」
「これホンマかいな?」
宇宙人との接触は八百万の神々にとっても驚きの展開だった。
「世界規模の問題だろ?　他所の神様とかどうしてるんだ?」
「それがな、宇宙人めっちゃアホらしいねん。他所だと酷い目に会うかもわからんて」
「今んとこうちの子らが頑張ってるわ」
「靖国の子らもえらいなぁ。子孫のためにアマテラス姐さんとこに陳情て」
「ちゃうねん。最初スサノオ兄さんとこに行ったらしいんやが、宇宙人と戦争するなら手を貸す言われて姐さんとこ行ったらしいねん」
「難儀やな。ほなら、兄さんこの事知っとるいうことか?」
スサノオは現在出雲を根城にしている。
しかし、会議には出てこない。
「兄さん気まぐれやからなぁ」
スサノオは子供っぽい所があり、その時々の気分で暴れん坊になったりするが、基本

的に人間には優しい。
上の者には噛み付くが、下の者には厳しくも優しい兄貴分なのである。
上の神や兄にも結構嫌な目にあっていて、気が緩むと暴れる事があった。しかしそれを哀しんでアマテラスが岩戸に隠れてしまったのはショックだったらしく、現在は自制心を大事にしている。
絶賛引き篭もり中だった。
とはいえ、まだまだ危険視されており、外国の神々の中にはスサノオより歳のいった神が結構いるため、なるべく国から出さないようにされている。外交問題になってしまう。
そんなスサノオだが、さすがに宇宙人がどうのこうのという事に対してはどう反応したものかわからず、とりあえず戦になるなら力を貸すとだけ答えた。
そもそも陳情の内容がぼんやりしていた。
「子らに力を貸して欲しいって言われてもな……」
現在、ゲヒルンフレームを開発中の者達と、宇宙人の対応に追われている一部の者達に対して加護を与えて欲しいというものだった。
「神の加護はもうおいそれと使えるものではなくなってしまっておるし」
いろんな所から横槍が入ったり文句言われたりするのだ。

人々の交流で神々の社会も色々面倒になっていた。
「しかし、やらんと日本……　地球が滅びるかもしれんというぞ」
「なんだったか？　ブルック？ポーラ？」
「誰やねん」
「ブラックホールですよ。あの黒いやつです。星が死んだ時たまにできるやつ」
「ああ、あの黒い玉か」
「そのデカイのが地球にぶつかってしまうそうです」
「あんなもん、ぽーんって放ったらええやん。ぽーんって」
「子らにはまだその様な力はありません」
「難儀やなぁ」
「はあ？　うちの子らまだ数に触れんかったんかい」
「せやから算だけはしっかりせーよ言うとったのに！　道真ちゃん来とるか？　いっちょこましたるわ！」
「落ち着けや！　道真ちゃん文系やし！」
「ほいで、そのブラックホールはいつ来るん？」
「およそ１０００年後らしいです」
「すぐやないか！」

「地球がなくなったら儂らどうなるんじゃろか」
「死ぬんじゃないですか？　上の方々はともかく、私達は人間がいなくなると存在できない者が多いですよ？」
「死ぬ……　あまりピンとこないねぇ」
いつも誰かが喋っている会議場が、ふと、静かになった。
自分達にも関わる事だと分かった。
しかし、やはり加護を与えたものかどうか悩みどころであった。
そんな中、一柱の神が声を出す。
「私は、力を貸したいと思います」
小さな猫の姿をした神だった。
彼女は小さな村の山道の神である。
「私の社を毎日気にかけているキクちゃんという子がおりまして。孫と一緒に時々掃除してくれたりお供えしてくれたりするんですよ。その子孫が宇宙から来る得体の知れないもののせいで死ぬかもしれないというのはちょっと……」
子猫神に続いて、声が上がる。
今度は仔牛の姿をした神だった。
彼は家族経営の小さな牧場の塚に祀られた神である。

生き物を育て、殺し、売る。その業に許しを与えるために祀られた神であった。
「それなら、僕も賛成します。僕自身は畜産どうかと思うんですけどね、家族揃って手を合わせて、小さな子供達は泣いてくれるんですよ。その子孫が苦しんで死ぬというのはちょっと嫌ですよ」
「若い連中はまだ感傷的なのが多いんかね」
という声もあるが、特に反対したりする者もいなかった。
「みなさん……」
小さくしわがれた、しかし、重みのある声が響いた。
皆の視線を集めたその声の主は、痩せこけた小さな老人の姿をしている。
厠神かわやがみ。
すなわち、トイレの神様である。
彼は皆がトイレの神になるのを嫌がる中、自らトイレの神様になった。
神々の世界で尊敬されている神である。
縁結びと関係ないこの会議に出席しており、いつも物静かな厠神が、口を開いたのだ。
神々はじっと、厠神の続く言葉をまった。
「ブラックホールですか……　加護については私が責任を取りましょう。もしもダメで、ブラックホールが来たなら、私がなんとかしますから」

しわがれた声で、シワだらけの顔でにっこりと笑顔を作る。
厠神は冗談を言わない。
本気でやるつもりだ。
神々がざわついた。
厠神は片手で小便を受け、もう片手で大便を受ける。
もしも本来入ってるはずの無い、ゴミなどを捨てられると、口で受け止める。
それによってケガレを受けて具合を悪くするというのに、本人は職務を全うしようと全力で受け止めてしまうのだ。
ここにいる本体の分霊達は各地で今も仕事を続けている。夜に起きている子らが多くなり、２４時間働いている神としても名が知れていた。
それを知っている子らはトイレを大事に使ってくれるが、このご時世、知らぬ子らも多く、ゴミや毒物を受け止めているせいで最近厠神の調子は良く無い。
だというのに、今度はブラックホールを受け止めようというのだ。
超質量の物体である。
胃がもたれるのは必至。
両手の戒めを解き、神としての力を振るうなら簡単にどうとでもできるはずだが、厠神は絶対にそんな事はしない。

仕事熱心な神の言葉に、他の神々は奮い立つしかなかった。
「厠さんにやらせるわけにはいかねぇ！　俺にまかせろ！」
「待て待て、お前じゃ格が合わん。私がやろう」
「落ち着け！　ここは儂に任せてもらおうか！」
かくして、誰が加護を与えるかで神々は騒ぎ始めた。
「おい！　尻洗い！　いるか？　尻洗いー！」
「ちょっとぉー！　その呼び方やめて下さいよー」
尻洗いと呼ばれて出て来たのは、中性的な美少年だった。
彼は尻洗い。水洗浄便座すなわち、ウォシュレットの神である。
「お前は外国でも顔が効くからな。もしも他所にバレたらお前がまず盾になれ」
「ええぇー……　そんなぁー」
ウォシュレットの神が肩を落とすと、
「てめぇは他所の子らの、特に有名な子らの尻子玉握ってんだ。いざとなったら……わかるな？」
「外交問題になっちゃいますよぉー」
ウォシュレットの神は半泣きであった。
「お前さんは厠さまのお陰で成れたのだ。厠さまのためだと思ってきばりなさい」

「うう……　やりますよぉ……　やりますけどぉ……」

古き神々には乱暴な神も多く、新参者のもやしっ子であるウォシュレットの神は、古き神々をちょっと怖がっていた。

とはいえ、自分の上である厠神のためになるとなれば、やはり奮い立つものがある。

「あー、もう。わかりましたよー！　いざとなったらやってやりますよ！」

振り上げた拳から、ぶしゅっ、水を飛ばす。

人の尻などザックリいく勢いである。

「おうよ！　その意気だぜ！」

出雲に集まった神々は力を合わせ、久々に子らへ加護を与える事を決定した。

なお、ここから一年間、婚姻届の届け出数が例年の半分以下となり、マスコミが騒ぐ事になる。

神々は神無月に出雲に集まる本来の目的を忘れて、厠神のために頑張ろうと誓い合った。

□

# ゲヒルンフレーム起動

０００４ゲヒルンフレーム起動

２０１７年１２月１２日。

近畿地方の山奥。

人里離れたとある工場にて、ゲヒルンフレームの試験運転が始まろうとしていた。

おそるべき速さだった。

計画を詰めるために和歌山の横縞鉄鋼の一室を借りて、計画に参加している者達で集まり、設計を詰めた。

それぞれが地元の工場や会社に連絡を取って、たまに試作させて、和歌山に送らせた。

１１月の頭ごろの事だった。

疲労困憊だったはずの体が軽くなったのだ。

スッキリした顔で目覚めた面々は、お互いに顔を見合わせ、首をかしげた。

それはそれぞれの地元の職員、職人達も同じで、３時間も眠ればスッキリ目覚める事ができた。

頭もクリアで、どんどん計画が進んだ。

そして、河村、山田、他の計画参加者達も、全く経験した事の無い速さでゲヒルンフレーム試作機は完成してしまった。

なぜか他の仕事が入らなかったり、キャンセルになったりという明らかな得体の知れない圧力による補助はあったものの、一から新しいものを作るには異常な速さだった。

誰もはっきり口に出しては言わないが、おかしいと思っている。

ある時、設計図を前に話し合いながら、問われた応力計算を暗算で出してしまった。

その瞬間、場の空気が一瞬凍った。問われてすぐに暗算で出せるようなものではない。

その後も不思議なぐらいスムーズに進んだ。

皆が頭の中に関数電卓でも入っているんじゃないかという冴えを見せ、手製の図面には手に定規でも入っているんじゃないかという正確な線が引かれ、ほぼ全員が完全記憶能力でもあるんじゃないかというもの覚えの良さ。ＣＡＤの入力ミスは１つも無い。

あれよあれよと設計が決まり、削り出しや組み上げではこれまでになかった程ピッタリとした手応えがあった。

まさに、神がかり的な何かが働いていると誰もが思った。

しかしそれを誰も口に出さず、ここまで来てしまった。

皆んな少し不安を持っていた。

仕事をきっちり仕上げたのは疑いようがない。
こんなに明確にやりきれたという感覚はそうあるものではないし、目の間に立つこのゲヒルンフレームは、客観的に見ても非常に美しい。
だが、首筋に何か繋がっている様な気がするのだ。
もちろん誰もそれを口にはしないが。
それは、そんな不安よりもやはり達成感と喜びの方が大きいからである。
少年の夢に大金をつぎ込むとどうなるのか。
そのリアルが目の前に立っている。

ゲヒルンフレームは、高さ１３ｍ程で、人間の骨格を模していた。
肋骨から骨盤にかけての中央、人間なら胃腸が入っている辺りに操縦席を取り付けてある。
この骨格の中には、いわゆる骨髄があるべき部分に小さなマイクロチップや脳波の増幅器が詰められている。
操縦席から脳波を受けて、それを増幅し、筋電義肢の様に、手足を動かす感覚で、各関節のモーターを動かす。
仕組みは単純だが、そもそもこの大きさの人型を立たせたり、動かしたりするという

のが難しい。
鎖で吊られてはいるものの、こうやって立っているのが不思議なものなのだ。
そして重大な問題を抱えている。
「このモーターの出力では歩けるかどうか……」
多くの部品を一から作っているものの、精度はともかくモーターの出力に関しては高精度によって効率がちょっと上がった程度だった。
「ま、元々の目的は脳波で動くかどうかだからな。前に進まなくてもと手とか足が動けばいいんじゃねぇか」
実は、この職人達、本来の目的をすっかり忘れていた。
頭が冴えてスッキリしているのをいい事に、人型ロボットへの情熱に身を任せて突っ走っていたのである。
ゲヒルンフレームが実現不可能なのをデータによって証明する作業が、ゲヒルンフレームをとりあえずできる範囲で再現してみようとなり、そしていつのまにか、人型ロボット作ろうぜ！　になっていた。
今年５９歳になる河村さえ、まるで少年に戻ったかのように目をキラキラさせながら作業に邁進していた。
完成したゲヒルンフレームを目の当たりにすると、やっちまった感は多少ある。

だが、それ以上に達成感があった。

「えっと……　じゃあ、乗り込みますね」

一番若い職人よりも更に若い少年が、ヘコヘコと頭を下げながら、しかし、人型ロボットを目の前にして瞳を輝かせている。

この少年は、発注元が連れて来た「パイロット」である。

それなりにボタンと操縦桿は付いているものの、脳波で動くかどうかの検証機なので特に操縦方法の訓練は受けていない。

というより、現物がなかったので、まだ取り付けられていなかった操縦席に座って、各種ボタンを覚えたりするだけだった。

今回は初の操縦である。

なお、少年の素性は探ってはならないらしい。

「サイ」という名前も、どうやら偽名らしかった。

いよいよ怪しいが、この少年自身がちょっとナヨッとしてはいるものの、人当たりも良く、それなりに礼儀正しかったので、時が経つにつれ、歳のいった職人達には割と可愛がられていた。

職人達、そして発注元の使い数人が見守る中、少年は操縦席に乗り込んだ。

脳波を感知するヘルメットを装着し、安全ベルトを全て締める。

ペダルを踏み、操縦桿を握った。
腕を動かすイメージでゲヒルンフレームの腕を動かすわけだが、実際の腕が動くのを止めるためにもこの操縦桿を握り、ペダルを踏む。
実はこの操縦桿はそのためだけにあり、操縦桿とは名ばかりのただの棒であった。
しかし、いかにもなロボットのコックピット演出に一役かっており、見ている職人達も、少年自身もワクワクしてくる。
「電源、お願いします！」
配置についた少年の言葉に、職人の一人がブレーカーを上げた。
ゲヒルンフレームに繋がっているケーブルから電力が供給され、関節各所のモーターに小さなＬＥＤランプの光が灯る。
「オールクリア。いけます」
ラップトップで電気の循環状態を見ていた一人が言った。
「よっしゃ、坊主！　いったれ！」
河村の声に、少年が答える。
「ゲヒルンフレーム！スサノオ！　サイ！　行きます！」
その掛け声に、どっと笑う職人達。
彼らはこの短期間にガン〇ム作品に慣れ親しんでいた。

ギリっと、操縦桿を握る手に力が入った。
実際の腕はここにある。しかし、感知された脳波が、ゲヒルンフレームの腕を動かした。
「おおおおおおお……」
溜息のような深い歓声が観客から上がった。
デカイ人型の腕が動く。
肩を回し、肘を伸ばして、指を閉じたり開いたり。
フレームの重さ、モーターの出力、あらゆるものが神がかったバランスで調整されており、これまでのロボットの様な、動作と停止の震えがない。
ひたすら滑らかに、それこそ人間の腕の様に動いている。
こんなものを作り上げた喜びと同時に、得体の知れない恐怖も感じていた。
これは、作ってはいけないものだったのではないだろうか。
人の骨格を模した形ではあるが、鎖につられて動かない状態ではなんとも思わなかった。
しかし、実際に動いている姿を見ると、巨人の骨の様に見えてくる。
ロボットというよりも、もっと生物的な……
最初は歓声を上げて喜んでいた職人達だが、あまりの動きの滑らかさに口を閉じてし

まった。
これは、いったいなんなんだ。
ハッとした一人が、ラップトップを使って、３Ｄシュミレーターで、今目の前で動いているゲヒルンフレームのデータを入れた。
だが、ラップトップの画面の中、シュミレーターで再現されたゲヒルンフレームは一目でロボットと分かる動きをしている。
彼の額に冷や汗が溢れる。
計算上ありえない動きをしている。
職人達が呆然としている中、サイ少年は、上に言われた通り、精神を集中した。
外から見れば、それはただ目を閉じているだけに見えただろう。
ゲヒルンフレームが動きを止め、サイ少年も目を閉じている。
何かあったのかとサイ少年に呼びかけようか迷っている数秒の間に、それは起こった。
ゲヒルンフレームが光り出したのだ。
その色は赤。
職人達もう声を出す事もできなかった。
お互いの顔を見合わせる。

誰かがイタズラでライトでも仕込んだのかと思ったのだ。
だが、それぞれの表情から、そんな事は誰もしていないと分かった。
そもそも、皆んなあのフレームを見て、直接触っている。ライトを仕込む様な隙間はなかった。
それに、本当にフレーム自体が光っていた。ライトなんて仕込まれていない。
光は電磁波の一種である。
何かしら不測の事態が起こって、フレームに使っている合金が可視域の電磁波を発しているのだろうか。
すぐに止めなければ。こんな得体の知れない現象、危険すぎる。
皆んなそう思ってはいるのだが、なかなか「停止！」の一言が口から出てこない。
サイ少年は
「時が見えるっ！」
とかわけのわからない事を言っている。
閉口している職人達をよそに、サイ少年は叫んだ。
「うおおおおお!!」
少年の叫びに同調して光が強くなっていく。
職人達も、発注元からの使いも、ジリジリと後ろに下がっていく。

サラサラと砂が落ちる様な音がする。
幻聴だろうか。
この光と同じく、得体の知れない何かが起こって、可聴域の音波が発生しているのだろうか。
赤い光が消えた。
そして、次に溢れ出したのは緑色の光だった。
エメラルドグリーンの、暖かい輝き。
「……なんでやねん……」
やっと、一人の職人から声が漏れた。
ゲヒルンフレームを拘束していた鎖がふわりと浮き上がった。
そして、一部がボロボロと崩れ出し、千切れる。
しかしゲヒルンフレームは倒れる事なく、そこに立っていた。
そして、一歩、踏み出す。
「「……歩いたっ！」」
職人達が思わず叫ぶ。
ゲヒルンフレームは3歩程歩くと、今度は走り出した。
職人達は口々に何かを叫んでいたが、あれほどの物体が激しく地面を踏みつけている

というのに振動がほとんどない事に気付く者はいなかった。
あっという間に工場を飛び出したゲヒルンフレームは、
「いっけーーーー！　スサノオっ！」
というサイ少年の声に応える様に、飛んだ。
遅れて工場から駆け出て来た者達が見たのは、エメラルドグリーンに輝くゲヒルンフレームが８の字を描きながら空中を旋回している様子だった。
しばらくボケッとそれを見上げていた職人達と発注元の使い達だったが、
「ゲヒルンフレームって飛べたっけ？」
「いや、それはミノ○スキードライブやろ」
「あのモーター、歩くのもやっとの出力しか無かったはずなんですけど……」
「その前に、あの骨格関節って、走る時の衝撃に耐えられるのかもわからなかったのに……」
やっと口を開いた職人達は、疑問しか喋ることができなかった。
一人、疑問以外をつぶやいた職人もいたが、
「いや……　なんでやねん……」
近畿地方の人里離れた山奥の工場。
その上空を滑らかに飛んでいるゲヒルンフレームを、皆見上げていた。

なお、ゲヒルンフレームの「ゲヒルン」とは、ドイツ語で「脳」の事である。
脳波（ＮＴ波）を増幅させるところから、そう名付けられたらしい。
空飛ぶゲヒルンフレームを見上げる人々は、最近の頭のスッキリ感といい、もしかして自分たちの脳がどうにかなって幻覚でも見ているんじゃないかと、少し、思った。

# 神々の輝き

## ０００５神々の輝き

時は少し遡り、１１月の頭ごろの事だった。
結局どの神が加護を与えるのか決まらず、このところ手隙になっていた多くの神々が開発チームに加護を与えた。
リスク分散でもある。
「加護は与えたが、この、げひるんふれーむ？　とやらは無理ではないか？」
「むりかね？」
「我が子らの技術ではまだ無理であろうな」
「１０００年で作れそうか？」
「それだけあればなんとか……　いや、わからんな。そもそもこれの『せってい』は、作った当人達でもわからんとなっている」
うむうむと唸っている神々の中に一石を投じる声があった。
「じゃあゲヒルンフレームの神様を迎えればいいんじゃないですか？」

ウォシュレットの美少年神だった。
「なるほど、直接神の加護を与えるわけか」
「それならばいけるかもしれん」
神々もまた、いつの間にか自分たちの立場をすっかり忘れてしまっていた。
「アニメの神は少し前からこの国にいるはずだ。来ていないか？」
「来ていませんね。まだ秋葉原でしょう」
「あやつ、このごろ縁結びの力を得たというのにまったく。とりあえず使いをやれ」
「アニメ作品の中の器物を神に迎えるとなると、アニメの神の加護は当然として、他に必要なのは何でしょう？」
「難しいな。作品そのものはともかく、細かい部分だ。力が足りんかもしれん」
神々もまた、上映会を開き、ガン〇ムを見ていた。
初代劇場版三作と、逆襲のロット、そしてＵＣである。
途中、ロットの主張は正しいかどうかで論争が巻き起こったが、現在はなんとか元の目的に戻ってきている。
その目的自体が実はズレていると気付いている神はいない。
いや、意図的に気付かない様にしているのかもしれない。
神々も楽しい事は大好きなのだ。

「神に迎えるにはおそらく力が足りないでしょう」
「アニメ作品から神になったモンおったよな？　ちょっと話聞いてみよか」
「ノノちゃんは？」
「きてませんね」
「ノノちゃんって、誰ですか？」
「ほれ、この間挨拶来とった機械のコや」
「本名は…　ナナコ？」
「七号ですよ。あの、髪が赤い」
「ああ、あの可愛らしコか」
「ノノちゃんダメやで。あのコが神として力を使えるんは一万二千年後や」
「でもとりあえず呼んでおこう。話を聞くだけでも良い」
「ほれ、あの魔法少女の……えっと……　あ、そう、まどかちゃんや！　まどかちゃんおらんか？　マドカちゃんかなり力あったはずやで」
「あー、無理ですよ。まどかちゃんはちょっと前にお友達に呼び戻されてしまいましたよ」
　その後も色々と話合ったが、結局上手い方法は見つからない。
　そこで口を開いたのは、またウォシュレットの美少年神だった。

「直接ゲヒルンフレームの神を迎えなくても、ゲヒルンフレームを神の管轄において、無理やり分霊入れちゃえばいいんじゃないですか？」
「なるほど」
しかし、だとしたら誰の管轄に置くかで今度はもめた。
この方法はかなりの力が必要で、ここにいる神々ではなかなか難しい。
厠神が「どれ、私がやりましょうか？」と言ってきたので、皆で止めた。

「なぁ、皆んなもうわかっとるやろ？」
一人の神がつぶやいた。
「まぁ……　な……」
「せやけど……　それは……」
縁の無い所に無理やり分霊をねじ込み、奇跡を顕現させる程力がある神。
「スサノオ兄さんしかおらへん」

・・・・・・

スサノオは引き篭もり中である。
妻の奇稲田姫（くしなだひめ）は、最初のうちは落ち込んでいるスサノオを構ってくれていたのだが、最近はＢＬに夢中だ。
地上に降りてからは色々と人間に手を貸していたが、それでも心の空白は埋まる事は無かった。
姉上を困らせてしまった。
粗暴な行いを反省し、心を改めてみたものの、やがて人も神の手を離れていった。
それは喜ばしい事なのだが、やはり寂しい。
なんだかボンヤリと日々を過ごす内に、出雲から出れなくなっていた。
上の神々はスサノオの渡航を禁止しているが、渡航どころか国の中を旅する気もわかない。
そんな折、靖国から使いが来た。
なんでも、宇宙人が来たらしい。
存在しない技術を求めているが、その引き換えに貰える技術で、この国はより栄える事ができるという。
このごろこの国の外は物騒な事になっているらしい。
備えは確かに必要なのだが。

スサノオからしてみれば、突然の事でどうしたらいいのかわからなかった。
「その宇宙人と戦争するのであれば力を貸そう」
適当にそう言って追い払った。
しかし、今更になって後悔している。
渡航禁止の身だが、宇宙は大丈夫だろう。
「この空の向こうには他の神も存在するのだろうか」
スサノオはかなり高位の神だが、人間の妻を娶り、人間と長く暮らしたため、付喪神や土地神、人と関わる多くの神々の様に、人間に似た考えもできる。
それは好奇心や憧れという感情だった。
高天原と重なっているこの国から宇宙に飛び立って、他所の惑星に降り立ったなら、そこにも高天原と同じ様な場所が重なっているのだろうか。
あったとして、そこに住まう神々はどの様な姿で、どの様な力を持っているのだろうか。
ゴロゴロと体を揺らしていると、来客があった。
「厠神か。どうなされたのだ」
立場上スサノオの方が高位だが、この厠神というのはスサノオにとっても尊敬に値する神である。

「スサノオさま。重ねてのお願いになってしまいますが、どうか、子らに加護を与えてください」
ゆっくりと厠神が頭を下げる。
願ったり叶ったりであった。
厠神が来たならば、一度は蹴った願いを聞届けるのにも十分な名目が立つ。

厠神が帰った後、ＢＬゲームをクリアしてホクホクの奇稲田姫が
「あら、随分と楽しそうな顔をしていますね。何かあったのですか？」
とスサノオに声を掛けた。
「ああ。あったぞ。楽しい事が」
スサノオはニヤリと笑う。
「姉上に話を付けてくれぬか。お前の言葉なら姉上も聞いてくださる」
「どの様な事を？」
「外に出ても大丈夫かと」
「あなたは渡航禁止だったのでは？」
「他所の国ではないよ」
スサノオはすっと、腕を上げた。

指先は天をさしている。
「宇宙だ」

高天原で話し合いがあった。
分霊とはいえ、スサノオを宇宙に送り、そこに神が在ったならば無礼に当たらないだろうかという声もあったが、アマテラスの説得によって、なんとか許可を取り付ける事ができた。
アマテラスはスサノオを不憫に思っていた。弟は気付いていないが。

かくして、スサノオは地上のそのゲヒルンフレームとやらに分霊を仕込んだ。
「しかし……　げひるん？　ふれーむ？　外来語ではないか。おい、誰ぞおらぬか！　使いを送れ」

・・・・・・

１１月の半ばごろ、横縞鉄鋼にサイと名乗る少年が現れた。
発注元が連れて来た「パイロット」らしい。
最初は訝しまれたが、人当たりの良さもあって、計画チームに溶け込むのに時間はかからなかった。
そのサイが「このゲヒルンフレーム、名前はスサノオにしましょう」と提案した。
そういえば、この実験機の名称が無い事に気付き、誰も、特に反対する事無く計画チームは了承した。
ただ、発注元からの使いは、名称を付ける事にストップを掛けて、上に確認した。
一日の内に許可が出たのだが、この妙な齟齬から、サイは発注元とは少し違うところから来ているのではないかと計画チームの面々は感じた。

□

# 取引

０００６取引

２０１７年１２月１２日。
総理官邸に再びウグイスが現れた。
次回の話し合いの約束はしたものの、日時は決めていなかった。
もうこのまま来ないんじゃないかと期待していたが、とうとう来てしまった。
阿部総理はすぐに麻宗を呼び、その間ウグイス、もといメルオル船長に待ってもらった。
待ち時間の間、メルオル船長と当たり障りの無い会話をしながら、どうやってフィクションを説明したものかと考えていた。
麻宗は1時間程で到着し、
「どうも、初めまして」
と、笑顔でメルオル船長に挨拶をしている。
一応資料は用意してあるのだが、どうやって説明したものか。

それに、この資料は少しおかしいのだ。
無理だ、ではなく、こうやる。そういう旨の説明が多い。
これはどういう事なのだろうか。
失敗した試みも多く書かれているので、まずこの資料を見せて……
「では、日本国の返答をお聞きしたい。ゲヒルンフレームの技術を提供して頂けないだろうか……」
メルオル船長の言葉に対して、阿部総理が口を開いた時だった、
「まずはこの資料を……？」
これから大事な話が始まるというのに、一人の男が麻宗に歩み寄り、耳打ちをした。
阿部総理は口ごもってしまう。
次に、麻宗は、
「ちょっと外と連絡取りたいんですが、よろしいですか？」
とメルオル船長に問い、
「はい」
というメルオル船長の許可を得て、席を立ちもせず、その場で携帯電話を取り出して電話を掛けた。
麻宗さんは何をやっているのか。

要人の会談でちょっとありえない行動に出ている麻宗に、阿部総理は完全に固まっていた。
そんな阿部総理の驚きを他所に、
「ホントか？　光ったのか？　赤？　緑？　ホントかよ！　飛んだ？　なんでだよ！」
麻宗はゲラゲラと笑いながら話をしている。
「おう、おう、じゃあな」
そして、通話を終了し、携帯電話をポケットに戻した。
「総理、ちょっと私が代わってもよろしいですか？」
資料を渡そうとしていた阿部総理を制した。
その自信に満ちた表情に、阿部総理も乗った。
「はい。任せます」
「どうも。私やこのゲヒルンフレームの責任者でしてね。メルオル船長、技術の提供はできません」
麻宗の言葉に、ウグイスドローンがうなだれる。
「そうですか……　それは残念です……」
だが、麻宗は続けた。
「しかしね、現物を貸し出す事はできますよ。そいつでどうか、交換条件を認めてくれま

せんかね」
　ウグイスドローンの顔がパッと輝いた。
　それから少しだけ話を詰めた。
　いかんせん、ゲヒルンフレームとその操縦者を送るため専用の輸送船が要る。
　もっと話を詰めるのは後日にしようと持ちかけ、今度はちゃんと日にちを決めた。
　ウグイスドローンが去った後、
「麻宗さん。ヒヤヒヤしましたよ。ハッタリで交渉なんて……」
　総理は、麻宗がとりあえず交渉を引き伸ばしたのだと思っていた。
「いや、ハッタリじゃねぇぜ」
「は？」
「できちまったんだよ。ゲヒルンフレーム。いや、スサノオっていうみたいだが」
　阿部総理は、豆鉄砲を食らったような顔で固まった。
「……麻宗さん、いくらなんでもそれは……」
「ま、明日見に行ってみようや」

そして二人は、空を飛ぶゲヒルンフレーム改め「スサノオ」を見て度肝を抜かれたのだった。

□

# 宇宙旅行

## ０００７宇宙旅行

サイから色々な条件が出された。
この「スサノオ」フレームは日本国内、出雲でしか製造しない事。
他所で製造してもこの力は発揮されない事。
初号機であるこの「スサノオ」にちなんで、今後はスサノオフレームや実機の名称にスサノオを入れる事など。
いちパイロットであるはずのサイ少年から提示される条件に、いちいち上と連絡を取っている受注元からの使い。
それは不思議な光景だった。
まして、ここには阿部総理や麻宗大臣もいるのだ。
開発チームは、二人の来訪でこれが国家主導の計画だったと知ったが、そこは薄々気付いていたのであまり驚きはなかった。
しかし、このサイ少年が、確かに礼儀はあるものの、この二人に条件を出している光

景は異様だった。

・・・・・・

新幹線の中での事である。

「あのパイロットの少年、サイってやつな。出身どこだったと思う?」

麻宗の言葉に、

「川島研究所の職員と資料には書かれていましたが」

サイは未成年であるため、職員というのも名目上の事であったが。

「うちのに調べさせた。あいつ宮内庁勤めだったぜ。皇族付きの能力衛兵だ」

「宮内庁……　という事は……」

「ああ、そうだろうよ。上から連絡があるとすりゃまずあの方だ。混乱を避けるために誰にも言わず、御心の内に留めておられたんだろう」

かくしてサイは、極秘で使命を授けられ、パイロットとして紛れ込んだ。

とはいえ、サイ自身も実は事情をほとんど知らされていない。

ただ、ゲヒルンフレームを信じる事、そしてスサノオの名を使う事を命じられただけだ。

宇宙人が来たという話は、この後、二人が工場に着いてから語れて大いに驚く事になる。
「いつの間にそんなおおごとに……」
「ま、いいじゃねぇか。こっちにもそのうち使いが来るんじゃねぇか？」
頭を抱える阿部総理。麻宗が笑って肩を叩く。

・・・・・

「え？　それマジですか？」
サイは、宇宙人が来たという話を聞いた時以上に驚いていた。
「ああ、おめぇには宇宙に行ってもらう。人類初の偉業だぜ？　他所の星を救うなんてな」
「えっ、でも僕……」
「宮内庁には了解を取ってある。近々勅令が降りるだろう」
「なんだ……　バレちゃってたんですね。でも宇宙人の事だったなんて知らなかったなぁ」
サイ少年は夜が訪れようとしている暗い空を見上げた。

気の早いいくつかの星達がキラキラと輝いている。

たった一機で太陽系の千倍の直径をもつブラックホールを押し返せるか、または消滅させられるかについて、サイは笑顔で「大丈夫だと思いますよ」と答え、技術者達は「もしかすると……大丈夫かも……」と微妙な返答をした。

計算上の出力を完全に上回っているばかりか、上限値が全くわからないのだ。

願えばそれだけ力が出て来る。

得体が知れない。

その仕組みを察しているのは、3人だけである。

・・・・・

メルオル船長が手配した輸送船は、気付いたらそこにあった。

近畿地方の山奥に、大きな学校の体育館程の大きさの箱が鎮座している。

ウグイス型ドローンに「来ました。あちらに」と言われ、振り返ったらそこにあるのである。

音も光も遮蔽、またはカモフラージュしている。

ここに集まった人類は、宇宙人の技術ヤベェと舌を巻いた。
「いえいえ。何に特化しているかという事だと思います。この惑星にはまだ恒星間航行の技術は無いですが、ゲヒルンフレーム……いえ、スサノオ骨格があるじゃないですか」

１２月も半ば。
やはり得体の知れない力が働き、僅か二週間でゲヒルンフレーム改め「スサノオ七七式初号機」は鎧でその身を包んで完成していた。
その姿はまさに鎧武者だった。
鎧はメルオル船長が提供してくれた。
設計をメルオル船長に送ったら宇宙用の様々な修正を加えられ、製造されて、月にいるらしい母艦から地上に降ろされた。もちろんこれも気付いたらそこにあった。
謎の素材で作られたとんでもなく精度が良いその鎧は、しばらく職人達にベタベタ触られていた。時折職人達のうめき声が響き、サイ少年などは怖がって近付けなかった。
鎧は外注になったが、スサノオ骨格は問題なく稼働した。
輸送船にスサノオごと乗り込んだサイ少年は
「いってきまーす」
と外部スピーカーで元気な声を聞かせてくれた。

これから日本人初、どころか地球人初の太陽系外惑星への旅が始まる。
というのに、気の抜けた少年の声と、むさいおっさんどものキラキラした瞳。
どこかに色気は無いものかと若い職人達は思った。
皆んなに見送られて、輸送船は少し浮かび上がって、するすると消えていった。

・・・・・

メルオル船長が言うには「三度の潜行で母星に着きます」との事。
地球時間でおよそ5日間の旅らしい。
やはり正確な母星の位置は知らされていない。
メルオル船長は教えても良いと言っていたが、阿部総理がそれを拒否した。
何事も余計な事は知らない方が良い。
ブラックホール彗星の速度は知らないが、地球へ１０００年かかる距離。
現在全く観測できないのだが、この話を聞いた開発チームは、妙な事に気付いてしまった。
この天の川銀河の直径はおよそ１０万光年である。
光の速さで端から端まで１０万年かかる。

メルオル船長によれば、彼らの母星は天の川銀河では無いらしい。
太陽系は天の川銀河の端なのでブラックホール彗星に真っ先に直撃する可能性はあるが、それでも最寄りのアンドロメダ銀河まで２５０万光年ある。
彼らの母星はもっと遠いらしい。
だとすれば、ブラックホール彗星は光速を超えている事になる。
果たしてメルオル船長の話は本当なのか。
今の人類にそれを確かめる術はない。

メルオル船長から提供された技術を研究していけば、やがて人類も星の海に旅立てるだろう。
異星人の存在を認識した。
それも、この銀河系だけで多くの文明が存在しているらしい。
やがて彼らと友になる時のために、人類は変わらなければならない。
日本政府が何かやっていたというのは既に米国にバレていた。
しかし、さすがに宇宙人とは思われなかった。
スサノオ骨格のデータがあったので、起動実験までのデータを丸々送りつけたら「アニメーションを実現させようなんて日本人は本当にクレイジーだな」という評価を頂い

た。
スサノオ骨格を秘密裏に開発していて、失敗した。そういう事になった。
アニメの技術をやろうというのだから、さすがに恥ずかしくて隠していた。そう思われた。
空を飛ぶスサノオ骨格が偵察衛星に捉えられてないかとヒヤヒヤしたが、「なぜか」偵察衛星はその時全く使用されていなかった。
その日米軍内でちょっとした事件が起こっており、それによって日本のトイレ機器メーカーに幾つかの損害賠償請求がきた。

スサノオ骨格の量産はしない事が決定された。
日本で、職人さん達が全力を尽くして、スサノオの名を付けると不思議パワーが発生するという得体の知れないものであるし、操縦者が限られている、そして、今の日本にとって、オーバースペック、もとい、オーパーツ過ぎた。
分かっている者たちには、神の力をおいそれと使う訳にはいかないという思いがある。

・・・・・・

「やっと帰ってくれたか。あっち行ってる間にサイのやつにちゃんと人類の事を伝えてもらわねぇと」
「そうですね」
ロケットの様に空に飛び立ったわけではないが、なんとなく二人は空を見上げていた。
「全く。宇宙人は危なっかしい。地球人類に滅ぼされかねないぜ」
メルオル船長と交換条件を話した際、お金について話をした。
地球にとって貴重な幾つかの技術と、何か金銭的な価値のある物品。
その様に要求してみた。
宇宙の美術品などに興味があったからだが、メルオル船長に「地球で言うところの貨幣経済は存在しません」と返された。
そして、黄金１０００ｔをポンっと渡された。
メルオル船長の母星では、分子をある程度組み替える技術があった。
特に黄金は素材として優秀で、合成技術が確立されているらしい。
月の砂１０００トンが黄金１０００トンに化けた。
現在の相場でおよそ４７００億円である。

阿部総理と麻宗はかなり焦った。
「今付き合うの無理だわな」
そんなわけで、メルオル船長には、調査に来る分にはいいが、人類が自力でそっちに行くまで交流は無しにしておいてくれと頼んだ。
詳しくはサイに聞け。と。

こうして、得体の知れない宇宙人のとのコンタクトは一旦終わった。

・・・・・

サイは、一日三時間程メルオル船長と話をする。
もう3日目だ。
たまにサイも知らない事を聞かれるので、持ち込んだパソコンのデータにお世話になっている。
輸送船の中は、完全に四角だった。
スサノオ七七式初号機が寝そべっている床には、持ち込んだ簡易トイレと食料コンテナ、あと、小さなコンテナを改造した個室ビデオルーム。若い職人が気を利かせてくれ

たらしい。映像ソフトも大量に。

僕、未成年ですよ。

とサイは注意したものの、寝室としては優秀で、眠る時に使わせてもらっている。輸送船の中は簡素過ぎて落ち着かないのだ。

人工重力がある事に驚いたのも最初だけで、既に慣れ、三日目ともなると、退屈でしょうがない。

「スサノオ様、宇宙人ってどんな姿なんでしょうね？　見れませんか？」

「見れはするが、どうせ母星に着けば会うのであろう。面倒だ」

スサノオ七七式初号機から、声が響いてくる。

「神様って宇宙旅行とかした事ないんですか？」

「さて。姉上や兄上は地球の周りを戯れに舞っておったが……　上の神々は知ってはいるのだろう。しかし、神が宇宙旅行しようなどと思うかどうか」

スサノオはだいぶ人間くさい。

「大丈夫ですかねぇ……　スサノオ様に強化してもらってますけど、僕自身は大した能力無いですし。生身は虚弱体質だし」

「大丈夫だ。俺がついている」

「それは頼もしいです」

「この身は分霊であるが、見たもの聞いたもの感じたもの全て高天原に届く。何柱かの神にも伝わる様になっている。滅多な事はするなよ？　特に、暴れるな。姉上は粗暴な行いを嫌う」

スサノオ様は本当にシスコンだなぁとサイは思った。

口には出さないが、スサノオは神であり、心を読もうと思えば読める。

だが、スサノオも知らないふりをする。

地球の神、そして地球の人間。

メルオル船長の母星に辿り着きブラックホール彗星を消滅させると、その話を聞きつけた各文明圏から様々なお願いをされて、地球に帰るまで５年もかかってしまう事を、輸送船生活三日目の二人はまた知らない。

５００年後。

純粋数学で近辺の空間を書き換えて進むという宇宙でも稀な推進方法を発明した地球人類は、とうとう天川銀河を飛び出し、宇宙の調査に乗り出した。

地球人類が接触していく文化圏の幾つかに「英雄スサノオ伝説」が存在しており、考古学者達が日本神話と宇宙の繋がりについて討論を交わす事になる。

スサノオ骨格は七七式初号機以降再び作られる事は無かった。
予備パーツはあったが、それがスサノオとして組み上げられる事はなく、どこに行ったのかもわからない。
五年後に宇宙から帰ってきたスサノオ七七式初号機は、一年程地球に居たが、再び宇宙へ旅立ち、そして帰ってこなかった。

□

２０１７年１２月２５日。
ダイバーシティ東京プラザ。
クリスマスだが、カップルよりも男組の方が多いユニコーンガン◯ム展示場。
デストロイモードの輝きが夜空に立ち昇っている。
その光は、まるで集まった人達の意識に反応しているかの様に、ゆらゆらと楽しそうに震え、寂しさにさめざめとこぼれていた。

人々は、その光が実は本物である事を知らない。

おしまい。